

## 【視点】

# エコノミストからアナリストへ

山 邊 俊 明

「アナリスト」という言葉であるが、筆者は、広い意味で捉えられた「経済的」現象に係る人間及びその集団の行動を「分析・解析」する人といった意味合いで使っている。既に、証券アナリストという資格もあることから、human behavioral analyst とでも言った方が正確であろうか。なぜ、「エコノミスト」という一般的な用語を用いないのかということ、従来からのエコノミストでは、その取り扱える範囲に限界が来つつあるのではないかと思うからである。

エコノミストが分析の対象とする人間は、いわゆる「ホモ・エコノミクス」（経済人）である。即ち、他者の事情を全く考慮することなく、唯ひたすらに自己の物質的な効用・収益を最大化することだけしか考えない、孤立した「アトム」的な存在として定式化される人間である。アダム・スミス（1723 - 90）以来、経済学は、綿々としてホモ・エコノミクス及びその集合体である「経済社会」について分析を行って来た。経済学が一定の成果を挙げることが出来たのは、このようにして分析の枠組みを「絞りこんだ」こと（いわゆる「最大化原理」の公理化）によるところが大きかったのではないかと考えられよう。

ところが生身の人間には、唯、経済の領域において「合理的」な存在であるホモ・エコノミクスの枠内に収まらない部分が元々かなりある。エコノミストは、こうした部分を切り捨ててきた（自覚的にか否かにかかわらず）。生物学的な種としての人間（ホモ・サピエンス（知性を備えた人））は、「ホモ・ルーデンス」（遊ぶ人）でもあり、「ホモ・センチエンス」（感ずる人）等々でもある。人間は、「最大化原理」だけに従っているわけではない。

さらに、生活水準が向上し、経済的・精神的余裕が生ずるようになると、ホモ・エコノミクスの枠組みには収まらない領域が急速に拡大して行く（例えば、無償労働、ボランティア、NPO 活動等々）。こうした領域における人間行動については、最大化原理は、全く無力である。これらの領域における価値観は、もとより人によって多種多様である。しかも、その価値観は、ホモ・エコノミクスとして捉えられる領域に対して影響を及ぼしている。

こうしたことから、従来からの「エコノミスト」では、力不足となって来ているのではないかと思うのである。分析可能な範囲の限界を突破する必要があるだろう。この意味で、「エコノミストからアナリストへ」という命題の意義が明らかになるのではないか。

[やまべ としあき]

[財団法人土地総合研究所 理事 調査部長]